

震災教訓の共有むすび塾@インドネシア (河北新報社と共催)

掲載日:2013年04月24日

C)河北新報社



津波で甚大な被害を受けたムラクサ地区で、住民と交流する「むすび塾」のメンバー—23日午前9時30分ごろ、バンドアチェ市(写真部・佐々木浩明撮影)

むすび塾@インドネシア・ムラクサ

増える新住民津波伝承課題

【バンドアチェ(インドネシア) 高橋鉄男(報道部) 2004年のスマトラ沖地震で住民の9割超が犠牲になったバンドアチェ市ムラクサ地区は、新住民や津波を知らない世代が増え、被害の伝承が心配されている。「むすび塾」の参加メンバーは住民に東日本大震災の教訓を訴えるとともに、語り継ぐ決意を新たにしました。

(1面に関連記事)

「語り継ぐ」参加者決意



一行は地区にあるラムジャハ村を訪ねた。プスタマン・アディ村長は「村に暮らす200人のうち、被災前からの住民は30人」と説明した。

ムラクサ地区は、国外の支援で資材が無償提供された。人口は被災後の約2200から約1万6800(11年)まで回復したが「津波が怖い」などの理由で住居は賃貸や売りに出され、新住民が増えた。

昨年4月1日にスマトラ沖でM8.6の余震が起きた。新住民の水販売業者アサヤ・ムナシエルさん(37)は「住民から津波のことを聞いていて私も逃げたが、避難する人でパニックになった」と語る。

東松島市の貝田行政区長中山勝文さん(67)は津波避難のタイミングを逸し、友人宅へ逃げた。浸水は1階にとどまって難を逃れたが「地震後は迅速に逃げてほしい」と訴えた。

多賀城市の東北学院大3年渡辺英莉さん(20)は、自宅近くの避難場所へ祖母とともにも津波にのまれ、祖母が犠牲になった体験を明かした。

渡辺さんは、イスラム教寺院のおさから「あなたにはアチェの家族です」と声を掛けられた。「つらい思いをしているのは一人じゃないと分かります。私と同じ思いをしないように伝え続けると話す。